

## 原稿執筆様式(フォーマット)

(赤字・黄色マークを削除してご利用ください) Wordソフトでは、A4版(「やや狭い」)で作成する。一太郎ソフトでは余白を上下26mm左右19mmに指定する(出版印刷時はA5版となる)。

＜論文種別＞ ※最上段に論文種別を編集委員会が入れるため、冒頭1行を空ける。

↓タイトルは数字・記号を含め48文字以内で記入(18ポイント)

# 保育士・幼稚園教諭に必要とされる運動能力の育成 —大学の養成課程での体育の指導を通して—

↓名前、ふりがな、所属を記入(14ポイント)

自然 稔(しぜん みのる)\*・学会 正志(がっかい まさし)\*\*

(○○小学校\*・△△大学\*\*) 学生・院生はそれがわかるよう記述

↓連絡先を記入(メールアドレスのみでも可)以後すべて(12ポイントで

□□市▽▽区××町6-2-23

△△大学～～学部##研究室

e-mail =====@=====.ac.jp

## 要 旨

↓要旨は論文の動機・目的から結論まですべての概要がわかるように300～700字で記述。

ただしキーワードまで含めて1ページを超えないこと。

幼児の運動能力の向上のためには、指導者である保育士・幼稚園教諭の運動経験や能力の向上が望まれる。本研究では、保育士・幼稚園教諭に必要とされる運動能力の観点から、その養成段階にある学生の状況を把握し、学校体育における運動経験との関係や大学での体育の授業後の変化を検証することを目的とした。運動能力として12項目を選定し、それができる程度を授業前の本人予想、授業開始時、授業終了時の客観的評価として記録し、それを比較した。結果としてほとんどの項目では本人予想より実際はできており、また授業開始時にできる学生が少ない項目については、短時間の指導によってできる学生が飛躍的に増えるものがあることがわかった。このことから保育士・幼稚園教諭の養成段階において現場で必要とされる運動能力を選択し、適切な指導することは、保育士・幼稚園教諭の運動能力の向上にとって非常に有効な手段であるといえる。

↓キーワードは3～5個(できるだけ5個記入)

【キーワード】保育士・幼稚園教諭の運動能力、保育士養成、幼稚園教諭養成、体育、幼児の運動能力

## 2ページ目以降 ＜段組なしの場合＞

### 1. はじめに

今日の幼児をとりまく社会環境の変化は、幼児の運動能力の発達にも大きな影響を与えていると思われる。幼児の運動能力の低下は、それに続く小学校以降の体力、運動能力の低下を引き起こし、体を思い通り動かせないなど重大な事故の原因ともなったり、創造性、人間性豊かな人材の育成を妨げたりするなど、大きな社会問題にもなっている(文部科学省、2015)。

いくつかの原因<sup>1)</sup>が考えられるが、入所・入園前からの運動に対する経験の不足は見逃すことのできない原因の一つである。とりわけ、都市部の公園の減少や幼児を対象にした事件・事故の発生は、屋外での運動経験の不足に拍車をかけている。

そこで、家庭や地域の子育ての拠点となる保育所・幼稚園での「運動遊び」を通して、いかに多様な経験を積ませることができるかが重要になってくる。それに伴い、保育士・幼稚園教諭に対しても運動に関する高い専門性が必要とされ、幼児の発達に応じた「運動遊び」を提示することが期待されている。

.....

## ＜2段組の場合＞

### 1. はじめに

今日の幼児をとりまく社会環境の変化は、幼児の運動能力の発達にも大きな影響を与えていると思われる。幼児の運動能力の低下は、それに続く小学校以降の体力、運動能力の低下を引き起こし、体を思い通り動かせないなど重大な事故の原因ともなったり、創造性、人間性豊かな人材の育成を妨げたりするなど、大きな社会問題にもなっている(文献1)。

いくつかの原因が考えられる<sup>2)</sup>が、入所・入園前からの運動に対する経験の不足は見逃すことのできない原因の一つである。とりわけ、都市部の公園の減少や幼児を対象にした事件・事故の発生は、屋外での運動経験の不足に拍車

をかけている。

そこで、家庭や地域の子育ての拠点となる保育所・幼稚園での「運動遊び」を通して、いかに多様な経験を積ませることができるかが重要になってくる。それに伴い、保育士・幼稚園教諭に対しても運動に関する高い専門性が必要とされ、幼児の発達に応じた「運動遊び」を提示することが期待されている。

.....

### (註)

本「様式・フォーマットは、『子どもと自然学会誌』第26号投稿原稿(投稿締め切りは2024年1月15日)から適用します。また、「投稿執筆にあたっての承諾書」(ホームページ掲載)も、記入の上、同時にご提出ください。

## ＜引用文献・注等記載(例)＞

※引用文献・注の記載書式は統一しないが、他の書式の場合も投稿論文の内容に関連する諸学会の様式を参考に、必要事項に漏れのないように記載する。例えば、文中に「いくつかの原因<sup>1)</sup>が考えられるが、・・・」とか、「いくつかの原因(文部科学省、2015)が考えられるが、・・・」というように記載し、文章末尾に注や参考文献の一覧をつける。その際、論文末に著者の姓のアルファベット順(または引用順)に文献を掲載する。

記載方法は、

### ①論文の場合(学会誌等):

1)森本信也・森藤義孝(1988)「中学生における粒子概念の習得に関する基礎的研究」『日本理科教育学会研究紀要』第29巻、第2号、1-10.

\*論文題名を「」で書く。それに続けて冊子名、巻号、掲載ページ(この例では1-10ページ)を書く。

### ②書籍中の論文の場合:

2)小川正賢(1992)「探究学習論」日本理科教育学会編『理科教育学講座 第5巻』東洋館出版社、1-104. \*論文(部分)

タイトル、編者、本の題名を書く。それに続けて出版社名、掲載ページを書く。

③書籍全体が参考文献の場合

3) 日本理科教育学会編著(2012)『今こそ理科の学力を問う』東洋館出版社

＊編者と出版年を書く。次に本の題名を書く。続けて出版社名を書く。

④オンラインからの引用の場合:

4) 文部科学省(2011)「小学校理科の観察, 実験の手引き」<http://www.mext.go.jp/shotou/new-cs/senseioun/1304649.htm>

(最終アクセス20××年×月×日)

＊著作者・年と題名を書く。続けてURLを書き、最終アクセス日を書く。

＊2023年5月28日総会で承認